盗まれた名画の秘密

　春川智明、年齢は三十歳、160センチの小柄にして体重は60キロというと太めの体かと思いきや逆三角形の上半身で背広を着ると着やせするタイプなのだ。

彼は福岡市に探偵事務所を開き、インターネットによる集客で大いに金を稼いだ。ホームページは何という有能なセールスマンだろう!

おかげで春川は宣伝広告費は払わずに済んだのだ。ウェブサイト制作を業者に頼んだのが宣伝経費と言えなくもない。

業者の男は、

「春川さん。スマートフォン向けのサイトも作りませんか。お安くしておきます。」

と携帯電話に連絡してきたが春川は、

「それは今のところ要らないよ。顧客は金持ちでないといけないわけだ。年齢もそれなりにいっている男女からの依頼によるものだからね。

ぼくのところにはアクセス解析ではスマートフォンから来ていないんだ。」

「そうでしたか。そういえば、そんな気もしますね。又、よかったらメール下さいな。」

「ああ、何十年先になるかな。」

それを聞いた担当者は絶句したようだ。携帯電話は唐突に切断されたのであった。

　春川は(ああ、浮気調査ばかりだ。しばらく休みたい)事務所の外に見えるのは福岡市南区井尻の湯気の立つような風景だ。それにも彼はウンザリした。

もともと春川は探偵小説に感銘を受けて探偵を志したのだ。

しかし、殺人事件を日本の探偵、いや、どこの国の探偵も取り扱うことはないといっていい。

携帯電話にメールが着信された。

開いてみると、差出人は害人三十面相だった。

　ご機嫌いかがかな、春川智明君。

君は浮気調査に飽き飽きしていると思う。だから、吾輩が君を刺激してあげようと思う。福岡市東区にある埋め立て地に新しく美術館ができたのは、ご存じだな?

そこで日本画の巨匠　幻界灘男の展覧会が行われている。

吾輩は幻界画伯の名画を見事にいただくつもりだ。

警察に通報するもよし、地方新聞に教えるなり、いや、それよりもはるかに強力な手段、ネットで情報を流すのも結

構。

楽しみたまえ、それでは。

害人三十面相より、だよー。

(ふざけた話だが、本当かもしれない。)

と春川は思考した。

幻界灘男は日本画といっても白黒の枯淡な水彩画などではなく、現代日本を描く画家で年齢は七十にもなり、一部の熱烈な崇拝者によって高額な値が美術オークションなどでつき、海外、特にイギリスの美術愛好家の資産家連中の購入意欲を誘う数少ない日本人なのだ。

その絵は神秘的にして宗教的な作品もあり、東京のスカイツリーの上に立つ観音菩薩の姿などが見られたりする。

幻界灘男は福岡県福岡市の出身で東京在住、分譲マンショ

ンの最上階に住む。旅行好きで自宅を開けがちなため、以前、戸建て住宅に住んでいた時に盗難にあい描きかけの作品を持ち去られたことがあった。それで今は二十四時間警備付きの分譲マンションに住んでいるのだ。

それ以来、盗難事件は起こっていなかった。幻界灘男の絵は福岡市でも来場者が多く毎日盛況な東区の美術館であるが(田舎というほどではないにしても福岡の美術館だから警備は手薄かもしれない。害人三十面相も目の付け所が、さすがなのかもしれないなあ、うむ。)と春川智明は思うのだが、しかし彼は私立探偵、こんな犯罪予告には興味はなかった。

幻界灘男の展覧会は一階の展示室で行われていた。午前九時から午後五時までの間だが、その日は春川智明に予告さ

れた日から一週間経った月曜日、つまり美術館は休日の日。

美術館は警備会社に委託して警備にあたっている。展示会が始まって十日、何事もなく過ぎて、大抵の美術展はそうなのだが、警備員の気も緩んでいる時だった。

警備員は控室でモニターの画面を見ている。二人の警備員は三十代の若い男性、二人とも独身だ。

「退屈だなー。」

「こんなもんだよ。ドラマか映画じゃないから何も起こらないのが普通じゃないか。」

と彼らは話し始める。

「柔道をやってきて女なしの青春、就職難でこの警備会社には入れたけど、事務員は四十代のおばさん。大学は男がほとんどの東京の大学でね。」

と武山は話す。

「そうか、おれも同じだよ。俺の場合は空手だけどな。瓦は二十枚くらい重ねて割れるけど。」

と滝道は答えた。武山は、うなずくと、

「おれもだ。」

「このまま一生を終わるんだろうか。」

「仕事は、それでいいけど。女との出会いはないとねー。」

「空手って女でもやっている人が、いるだろう?」

「それは柔道だって、同じだろう。」

「ああ、でも、あまり好みじゃない。」

「それは、おれもそうさ。」

その時、ドアが開くと若い女性が顔を出した。武山と滝道が武道家らしい目で、その女性を見たが何という美しい顔立ち、長い髪と赤い唇は笑顔を作り、両の瞳は涼やかに黒

目が大きい。

「失礼します。わたくし、今日から入館しました江浦(えのうら)みさきといいます。これから、よろしく、お願いします。」

甘く透き通る声だ。身長は百六十センチ弱というところ、当美術館の制服を着ているし胸には館員証をつけている。

二人は武道家らしい構えを解いて雇われている警備員らしき態度に変わると、

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

と口々に挨拶した。

江浦みさきは一歩、部屋の中に進み出ると、

「さっそくですが、幻界灘男画伯の展示中の絵のうち、「観音菩薩の慈悲」を持ち出すことが必要なんです。それは今日一日ですが、画伯からの要請なのです。

ですから、警備の方に了解いただきたいと思いまして。」

「観音菩薩の慈悲」は時価、三十億のもので、東京のある宗教団体から美術館がレンタル料を払って展示会のために借りているもので、今回の展覧会では最高の日本画だ。

アメリカの自由の女神の頭上はるかに高いところに観音菩薩が空中に現れて、右手でオーケーの印を作り、左手は手のひらを上にして前に差し出している構図である。

青紫の靄が観音菩薩の周囲に漂う神秘的な感が見る者の気持ちを惹きつける。

武山と滝道は互いの顔を見合わせると、武山が答えて、

「わかりました。どうぞ、我々はモニターで見ておりますから。」

と笑顔になる。

江浦みさきは胸のポケットからキャンディーの包みの様なものを取り出すと、

「とても香りのよいキャンディーを幻界画伯から戴きましたの。警備の方に、あげてほしいとのことでしたから。」

と話しかけて優しい手つきで二人に差し出す。二人は右手のひらを差し出して、

「いただきます。」

とうれしそうな顔で、そのキャンディーを受け取った。江浦みさきは

「鮮度が大事なキャンディーですの。すぐに召し上がってくださいね。」

ニコリとうなずくと、部屋を出て行った。

江浦みさきは香水とは違う若い女性の持ついい匂いを警備

室に残していた。武山は、

「新しい館員さんらしい。毎日、楽しくなりそうだな。」

「うん、このキャンディーも、いい匂いがするな。」

「食べよう。鮮度が大事なんだって、言ってたな。」

「ああ、そうしよう。」

二人はキャンディーの包みを解いて大粒のそれを口に入れた。甘く広がる洋風な味、二人はモニターに向き直った。

二人とも「観音菩薩の慈悲」が展示されている場所のモニター画面を見入る。そこに、もうすぐ江浦みさきが現れるのだ。だが、二人は美人館員の彼女を二度と見ることはなかった。

夕方の六時になった。警備員交代の時間だ。武山と滝道と

交代する夜勤の警備員二人は警備室に入ると、

「おい、起きろよ。交代だっ。」

「なんで寝ているんだぁっ。」

と口々に大声で叱咤した。

だが、椅子の上でぐったりとしている二人は目を覚まさなかった。